

研究所だより

第488号
2025年 7月16日
発行：土佐清水市教育研究所
TEL 82-3015

“ 名も知らぬ 遠き島より 流れ寄る 椰子の実一つ
故郷の岸を離れて 汝（なれ）はそも 波に幾月（いくつき）
旧（もと）の木は 生（お）いや茂れる 枝はなお 影をやなせる ”
『 椰子の実 』 作詞：島崎藤村 1936（昭和11）年 日本の歌曲



本格的な夏の到来！ ～熱中症対策等を万全に！～

7月22日（火）は「大暑」（22日から立秋までの期間を大暑と呼ぶ場合もあります）。大暑は書いて字の如く、この頃が一年で最も暑さがきびしくなる時期を指します。夏の土用の丑もこの頃です。日本で「暑い時期を乗り切るために、栄養価の高いウナギを食べる」という習慣は万葉集にも詠まれているように古代に端を発するとされていますが、土用の丑の日に食べる習慣となったのは、安永・天明の頃（1772-1788年）と言われています。農林水産省の広報用 Web マガジンでは、ウナギには夏バテ予防に必要な栄養素が豊富に含まれていると紹介されているようです。（ウナギを食べる習慣についての由来には諸説有り）また、大暑をはじめとした夏の暑さに打ち勝つためには「う」のつく食べ物を摂るとよいとも言われていますので、栄養価の高い食べ物を食べて体調を整えていきましょう。
①ウナギ；夏バテ防止に効果があるビタミンB1、Aを豊富に含む（他に豚肉、レバーなど）
②梅干し；疲労回復に役立つクエン酸が効果を発揮（他に酢、レモンやみかんなどの柑橘類など）
③うどん；夏バテ予防・食欲増進
引き続き、熱中症予防対策（水分補給・塩分補給・睡眠の確保・体調管理等）の徹底を心がけてお過ごしください。



「指導と評価」2025. 5月号より（抜粋）

協働学習が成り立つ学級集団づくり

学級集団づくりのための児童生徒のアセスメントと支援

早稲田大学教授
かわむら しげお
河村 茂雄

1 協働学習が成り立つ学級集団づくりのスタンダードな流れ

学級集団の状態を捉える視点として「安定度」と「活性度」があります。「安定度」とは、学級の集団としての規律（ルール）と開かれた親和的な人間関係（リレーション）が統合されて確立し、協働活動ができる度合いです。「活性度」とは、個人の存在や考え方が大事にされ、メンバー同士が建設的に相互作用できる度合いです。

心理的安全性の高い学級集団を形成するためには、まず「安定度」の一定程度の確立が必要で、そのうえで「活性度」を確立していくのがスタンダードな手順です（河村、2022）。そのポイントを、安定度の準備を中心に3段階で解説します（河村、2025）。

(1)安定度の準備—目標・規律・関係づくり

学校だから協働活動・学習するのは当たり前、このような考え方は令和の現在では通用しません。安定度確立の準備として「目標・規律・関係づくり」に取り組む必要があります。児童生徒が協働活動に取り組めるようになるためのレディネスを育成していくことが不可欠なのです。

①目標づくり

学級集団に所属してクラスメイトと協働する前に、学級集団に所属する条件、年間の活動内容、学級集団で協働することの意味や意義などをしっかり説明し、子どもに理解を得ることが大事です。そして、みんなで学級目標を定め、その達成を目指すことを動機づける必要があります。

②規律づくり

人々が集団で建設的・親和的に生活・活動するには、集団活動・生活のシステムを形成し、維持することが必要であり、そのために一人ひとりが守るべきルールがあります。学級目標を達成するためには、集団生活・活動を協働して行っていくことが求められ、そのために学級のルールが必要であることを理解させ、遂行させていく必要があります。

③関係づくり

学級目標を達成するためには建設的に協働していくことが必要で、不安のグルーピングで小グループを形成し排他的に行動するようではダメであることを理解させます。学級集団の中で、新たなメンバーと交流する必要性を理解させ、少しずつ協働活動に取り組ませ、対人不安を軽減させていくのです。

(2)安定度の確立—協働づくり

児童生徒が小集団の活動を通じて学級の雰囲気慣れた頃から、少しずつ難易度を上げた協働活動に取り組ませていくことを通して、中集団から全体集団で不安なく協働活動ができるように慣れさせていきます。

(3)活性度の確立—協働学習づくり

協働活動に自律的に取り組めるようにするとともに、対話を通した協働学習ができるように支援していく段階です。建設的な人間関係が確立しつつあるので、授業に「対話」を活用する場面を積極的に取り入れることも大事です。

このような計画的な取り組みを確実に実施することで、学級集団に「実践共同体」としての基盤が形成されていくのです。

2 個別に特別な支援が必要な児童生徒への対応

現在の学校の教室には個別に特別な支援が必要な児童生徒（以下の①②）が、確実に一定の比率で存在します。

①発達障害等に起因する問題

②発達の不全—自律に起因する問題（家庭・経済・福祉・司法面に関する問題）

学級全体で協働活動する前に、それぞれの児童生徒に個別の援助を一定量行うことが確実に必要です。学級集団内の児童生徒の個別支援には、エンゲル（Engel, 1977）が提唱した「生物・心理・社会モデル（BPSモデル）」の視点が有効です。このモデルは、人間は3つの側面が相互に影響して成り立っており、疾病や不適応などの問題も、これら3つの側面の相互作用として現れていると考えるものです。

B（Biomedical）とは生物的側面で、発達障害等に起因する問題です。P（Psychological）は心理的側面で、抑うつ等の心理面に起因する問題です。S（Social）とは社会的側面で、人間関係等に起因する問題です。

教師が児童生徒の問題を理解するためには、この3つの観点から検討していくことが必要です。不適応にいたるような「生物的側面」や深刻な「心理的側面」に起因する問題には専門的な支援が求められ、その配慮と対応をせずに「社会的側面」レベルの人間関係の調整（励まして行動を促す等）の対応をしてしまうと、効果がないばかりか、逆効果になる場合もあります。



近年、特別な支援が必要な児童生徒の個別支援に追われて、仕事量が膨大になり疲弊している教師たちが少なくありません。そして、協働的な学びが成立する学級集団の育成が難しくなっているのです。その結果、協働学習につながる学習展開を設定することができないのです。また、形だけ設定したとしても学習活動が形骸化してしまうので協働学習の成果が上がらず、従来の知識伝達型の授業で十分であるという誤解もできてしまうのです。

大学で行われている協働学習といえばゼミが考えられます。学部の場合、4年生が10人前後で、そこに大学院生のTA（ティーチング アシスタント）が入って、学生の個別サポート（時間外も含めて）をしてくれています。このような学習環境の中で、その時のテーマに向かってみんなで議論していくのです。ゼミは選択・選抜がありますから、学生たちの能力や興味と意欲はある程度そろっていますし、協働学習の展開と個別サポートにもそれぞれ人員がいます。

つまり、このような学習環境があって、協働学習が展開できているのです。このような条件がそろっていなかったら、他の学習展開を検討するかもしれません。小中学校では、多様化した学級内の児童生徒に個別最適な学びへの支援をしつつ、学級全体で協働的な学びを展開していると考え、この教育実践はとても高度でハードルの高いものだと思います。



3 個別最適な学びと協働的な学びの統合

学級内における個別最適な学びへの支援は不可避なものです。だからといって、協働的な学びの推進も停滞させるわけにはいきません。では両者をどのように統合していけばいいのでしょうか。

いまの学校教育で育成が期待されている資質・能力は、特定の知識や技能の習得にとどまらない問題解決能力であり、自律的な選択と行動を通して獲得される思考と情意とが相補的に統合された能力です。つまり、問題場面で活用できる「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」を中心とした認知能力だけでなく、取り組む際の意欲の喚起・維持や、対人関係を調整して協働するための「ソーシャルスキル」まで含まれる「学びに向かう力、人間性等」を中心とした非認知能力の育成も重視されているのです。

そう考えると資質・能力の育成は授業場面のみならず、学校内で展開される協働活動全体が、その育成の場となるのです。

その協働活動の基盤となる学級集団づくりとは、児童生徒たちが相互に支え合い・学び合い・高め合えるようになる学級集団を育成していくことです。

協働学習が成立する学級集団の状態とは、問題がない学級集団ではないのです。学級内に生起するいろいろな問題を、児童生徒みんなで、支え合い・学び合い・高め合いながら問題解決していける学級なのです。学級内の児童生徒が相互にピアサポートし合える、学級というコミュニティといえます。

児童生徒に資質・能力を育成していく教師の実践は、児童生徒を学級集団での生活と活動にコミットさせながら、相互に支援し合えるコミュニティ・学級集団に参画する意義を理解させ、そのために必要なスキルを、付随的に体得させることなのです。この取組を楽しく、満足感が高くなるように展開し、児童生徒が自らやりたいと取り組むようにすることが、教師の指導力といえるでしょう。

目指すべき学級集団は「実践共同体」です。共通の関心や目標を持つメンバーが、知識や経験を共有し、相互に学び合いながら、その共通の関心事に対する実践的なスキルと知識を向上させる社会的な集団です。その集団での活動体験から付随的に認知能力や非認知能力も獲得していくのです。

したがって、学級集団が実践共同体となっていくためには、高いレベルの安定度の確立が必要条件になるのです。学級集団づくりにおける安定度の確立は、実践共同体となっていくための基盤づくりなのです。

4 学習活動は児童生徒の事態と学級集団の状態に規定されるーアセスメントの必要性ー

実践共同体の学びにおいては、児童生徒の資質・能力の育成と学級集団づくりの成果は同時進行で高まっていくのです。実践共同体の学びのレベル（その中心が授業の展開）は、それぞれの児童生徒の実態とその人間関係の状態、つまり「学級集団の状態」に規定されるのです。

したがって、教師には、「個々の児童生徒の実態」と「学級集団の状態」の両方を押さえ、その結果を統合してアセスメントし、協働学習の内容・方法を設定して、展開していくことが期待されるのです。

＝引用文献＝

・Engel.G.(1977). The Need for a New Medical Model: A Challenge for Biomedicine, Science.

New Series. Vol. 196. No. 4288 (Apr. 8, 1977). 129-136.

・河村茂雄(編著)『開かれた協働と学びが加速する教室』図書文化2022年。

・河村茂雄『ピアフィードバックのゼロ段階』図書文化、2025年。 → *教育研究所所蔵

・文部科学省「特別支援教育の推進について(通知)」2007年。



＝第75次土佐清水市教育研究集会・一日教研＝

1. 期日 2025年 8月 1日(金)
2. 会場 午前 開会行事・講演 清水高等学校集会室(4F)
午後 部会研修 各会場(清水小学校・清水中学校・給食C)
3. 日程 受付 8:45～ 9:00
(1) 全体会(開会行事・講演)
開会行事 9:00～ 9:30
講演 9:30～11:45
講師 三島 晃 陽 氏(岐阜県教育委員会 教育総務課 教育主管)
演題 『子どもたちが変われば、地域の未来が変わる』
(2) 部会研修 13:30～16:45 各会場



夏季休業中の予定

◎教育センターは、夏季休業・学校閉庁期間中も開所しています

①第2回教研推進委員会

日時：7月22日(火) 13:30～14:30

会場：清水小学校 会議室

②第2回転入教職員研修会

日時：8月21日(木) 15:00～16:45

会場：竜串福祉センター

③第2回あすなろネットワーク

日時：8月25日(月) 15:00～16:45

会場：教育センター 会議室

*学校閉庁期間(8/7～8/17)

